

1 当院における子宮頸部細胞診の従来  
2 法と LBC 法の比較検討

3  
4 ○師岡恭之, 小山芳徳, 安達純世, 渡邊孝子, 豊永安洋,  
5 山本善也(帝京大学ちば総合医療センター)

6  
7 **【目的】** 当院の婦人科子宮頸部細胞診において BD  
8 社 SurePath™System(以下 LBC 法)を導入したことによる,  
9 標本適否, 判定率の変化を検討する.

10 **【方法】** 2010 年 1 月~12 月の直接塗抹法(以下従来  
11 法)による 4212 件と LBC 法を導入した 2012 年 1 月~  
12 12 月の 4483 件を対象とし標本の適否, 判定結果に  
13 ついて比較検討を行った.

14 **【結果】** 標本の適否については, 従来法では不適正  
15 標本が 33 件(0.8%)であったのに対し, LBC 法では 0  
16 件(0%)で不適正率の減少を認めた. 判定結果は従来  
17 法では全 4212 件中, NILM が 3895 例(92.5%), ASC  
18 が 120 例(2.9%), SIL が 163 例(3.9%), SCC が 9  
19 例(0.2%), 腺系病変が 24 例(0.6%), Other malign  
20 が 1 例(0.02%)であった. LBC 法では全 4483 件中,  
21 NILM が 4166 例(92.9%), ASC が 117 例(2.6%), SIL  
22 が 155 例(3.5%), SCC が 22 例(0.5%), 腺系病変が  
23 23 例(0.5%)で, 両者の判定に差異は見られなかつ  
24 った. また, Candida infection と判定された件数は  
25 従来法で 38 件(0.9%)であったが, LBC 法で 86 件  
26 (1.9%)と, 検出率の上昇を認めた. また, 従来法で  
27 ASC-US と判定された 110 例中 62 例に HPV 検査が施  
28 行され, うち 43 例(69%)は HPV 陽性であった. 一方,  
29 LBC 法では ASC-US とした 109 例中 70 例に HPV 検査  
30 が施行され, 62 例(89%)が陽性で, 陽性率は有意に  
31 高かった( $p < 0.01$ ).

32 **【考察】** 従来法に比し LBC 法では乾燥や固定不良を  
33 防ぐことにより不適正標本の件数が減少した.

34 また, ASC-US と判定された患者の HPV 検査の陽性率  
35 は従来法で 69%であったのが, LBC 法では 89%と有  
36 意に高く, HPV 感染所見に対する診断精度が向上し  
37 たと考えた.